



• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 JAPAN



へ15
3039
10

薬相表

蟬丸 半月夜話後編 卷之五

江戸 白頭子 柳魚 編次

第拾九回 逢阪嶺新闖

夫事を議ひ人ふあらず。事成をハ天ふあらず。と彼葫蘆
谷の孔明が歎く。宜る。武蟬丸ハ小仏越々や飛民
次郎を手ふり。再び渠が心の臓の鮮血をとつて。黒毛散
合して腹へたれ。忽く如く髪の毛墨よりも黒くあり。是
を益心中より妙乗の奇特を感じ。是より又浪人の姿を打扮。
兩刀を持て。蘭織の笠を深くかぶ。直に洛の方を馳たる。
太程も洛より紀春光郷帝の内勅を依る。諸君よ新裏を

飯島三省

とべて 徒 来 の 旅 客 を 吟 味 を き は。 武 官 へ 命 し ま ひ な れば。
先 洛 近 き 逢 陵 峰 は 新 関 を あ づ ら ひ。 関 守 十 二 人 は 関 兵
士 の 号 を 賜 り。 送 相 詰 る。 入 三 井 寺 よ く 鍾 壇 術 と て 二 千
人 物 の 具 よ 身 を き こ ん。 金 刚 力 士 の 如 く 念 怒 の 勢 み て 扱 へ
く う。 扱 関 の 上 眼 よ へ う 箭 鎗 長 刀 の 類 を 並 べ。 前 み は 実 棒 差
又 千 般 の 武 器 を き こ ん。 魏 し 堂 一 威 風 粟 い に て 繰 蔽 重 す る。
形 勢 之 朝 よ へ 辰 の 刻 を 相 圖 よ 木 戸 を 宛 た。 タスハ 西 の 刻 を
相 圖 よ 木 戸 を 閉 専 ら 徒 来 の 男 女 を 改 國 处 活 業 年 齡 ま で
委 し く 問 調 り つ。 彼 賤 の 女 が 生 死 存 亡 を き こ ん。 折 う。 一 日 勿 ち
と く い ふ 一 個 浪 人 笠 を ふ く して 関 所 へ 振 る の ま く て 行 過 へ と さ う
年 若 き 一 個 浪 人 笠 を ふ く して 関 所 へ 振 る の ま く て 行 過 へ と さ う

休 え 其 日 の 関 兵 士、 福 塚 叶 母 助 幸 と い ふ 者 斯 と 見 る よ う
聲 う け て 這 奴 何 者 る と へ 肝 太 く も 天 下 の 宙 安 取 と て 忍 せ
ぞ。 笠 と 着 く る あ づ か て 通 う ん と そ る や と く 引 と く て 面 改
本 貞 性 氏 を 級 明 せ よ と 下 知 ふ 徒 ひ 又 壇 衆 へ 得 う と え り
寄 す。 俟 と あ づ か て 編 笠 を お う ん と う る 利 腕 を。 林 ト 上 有
ま
間 も あ づ か そ 又 左 手 ト 討 く う そ 身 と ひ き て 襟 首 捕
へ て 動 う そ も。 ヤア 尾 篠 す き 坊 主 や。 浪 人の 編 笠。 虚 無 信 の 天
蓋 面 を 見 せ ね が 天 下 の 大 佐 実 取 へ 愚 何 处 ま で 笠 を 脱 て て
あ づ か ね。 と 两 人 を 左 右 へ 突 や と ば。 福 塚 あ づ か て 荒 う げ よ。 捷
平 素 は そ そ ゆ も せ よ。 此 前 あ る 人 あ づ か て 無 く 建 て。 此 前

冥漫非とも差をぬきして。本國姓名年齢近審ふ告め
のうちん其處一すも動かし。と笑ひて浪人嘲笑ひ。否子
ゑく姓名へ名号がく一四の五のいろと通じきよといへども
福塚頭をうち描り。倫言へ汗のごとし。と一そび天子の勅命よ
そ云えせよとさるを差もとくを名の名号うぞ争ひ爰席
通さるべき。とソフハ浪人叶母ス翁ひ此うえハ詮術る一去り
ゑく我本國姓名へ今あくらきよよ告難。家の系圖爰み空
是正元くおのづと知るん竊ふ披見下されよと。す儀をさしゆく
せを。助幸不審もれや下ねぞ容子あくんと冥き見るよ賤方よ
内制表の短冊あくくちむ三十一文字。もろより駿。き肩と筆

此和哥をもて系圖もと宣うる。倘ハ君ハ。美濃と近江の
國境寢物語村の御誕生ふくへあくがる。と向ふは浪人
詞を改め。な何よも其寝物語村の押頭とひ賤の女う
腹ふ出生。みーる我身こそ。おふけみくも一天の君表仁
天皇の内落胤安ハ此身を産落。一産後のふやく死去
く。祖安達ニ養育され。此年來陸奥越路ス吟行。う。
病ふも名手う上べうりへ。世の中東西ふ様ふく。僕人
謹者も多うる世ふきば。憇ひよ名手う坐る。まく却て人
ふ怪一々と。此身又禍起きべく。帝のうこよう覧
其うてやう下賤よ文くも時節と僕と祖母の遺

言を曰へ今日をつゝと。此頃も世の取扱ひ無と
吾佛が踪跡とば帝より尋ねふと風ふ雨。故こそ時氣
到來せりと洛へ登らぬと語りゆふ。福塚叶母達
床坐ふ飛走り玉又頭をもつけて。これ方体みやそれ
とも知らず最前よりの無禮の段く真平に赦免下る事
し。先此方へと倡へ忽登る高内庵。こも緩くと弁ふと
れば叶母へ再び手をつゝへ。親王よりは將衣束を改め。疾
疹内にて天皇と汝親子の由名手あらあるべし。豫て用意
の脚袋束ニシヘ持と。言付せば一人の侍さへ心得白木の
基ふ冠装束易事にて左係へ持出されば。彼浪人へ赤点頭

いりきよ地下の姿にて昇殿せんより恐れあり。隨神社丁の
准傍せよと。詞つきとへ緩急よがく着うやう白小袖襟
も捺みて五ツ六ツ七ツ下りの赤ちやどし。黒羽二重又引くへと
忽く見る優美の形相笏摺へて立あられ。警蹕のあす諸
ともふ突の戸止りおこうと来る。一人の旅者へ左視右視
つゝ心よ領き。無腸道人暫く待ことあうけとて。併立
し。又行ふると立ふこう。陸奥の夷賊熊子の荒夜又
残黨詮義をべきゆることあり。まづく俟ねと見て侍
と立どす。ヤア見れば見る顔もみな地主者の分際だ
ぞ。我をさして。無腸道人の荒夜又の残黨かとハ何日

浪言抒我と誰とう思ふ是近へ民向ニ成長ニニど
みくも天子の落胤地中不脅々藩籠の今昇天の
得ニ洛へ登り鳳園にて父子の名矣然るさんとモタ幸
先くドク憎き下卑め檢非違使ニ言つて急変罪を
乳へミ奴されと。初て參内す。今日みどバ廣大の茲悲と
ちづく教てくさる。疾く行と劣まく引のけ代んと云る袖
を捕へて嘲笑ひ思ひ出モ七年以前奥羽小泊の濱で
ヨリ月もおぼろる冬の夜よ遙う人の叫ぶあ。子細あらん
と。並松の小藪ニ隠れモ物色ハバ人正屠り血衣とと。客
子ハ何う白紙又包一物と奪ひ取立云体の怪しきよ。道

と遮り懷中より。引出しゆる帛紋包。ぬよやう。渡さ
奈合みおも又一人。来る。旅客を汝と心得捕るひまよ
其場と逃去。其後同國外ケ濱。塩燒長者が鐘愛女の奇病
を辛ひ無勝と替名し。長者が家又入こそ。牛頭六馬頭
七二人と商議。斯言ふ吾を殺さんとせ。僻道人其おも
ハ白髮みて齒も古稀み近」と見へ。今見る取れ血氣狂
交。年齢甚く遼ひされど面体恰合見覺あり。彼は唇八
合すと白髮より棄すと呑むものあり。あ
う。小泊の濱邊みて人を殺し血をとり。其葉へ今せ
とてあるべ。當時我身は尚うト帛紋包の其裏

舊の白骨もつ。熊子の荒夜奴が遺骨ヒ記。汝を荒夜奴が残黨と知り。斯顯々々上うるべ寒く名乗るべ。洛の画工博雅と人世正忍ぶ假の名。实我とて人年衰実親皇废謀反のおも討手又對ひる三位博雅サア尋す常み縄されど。鈎元くろけ誥より。呵くと嘲笑我お何よも民間よ成長し。普く下情をこくらんと年未奥越路を吟行されど。從来身の望あざば。人を殺せ一覺へまく無勝さんど名告一こと嘗す。人違ふ後悔ぞそとひへば惜雅懷中より。命歛包主とうござむ。亦完月先へ突付。汝はよく荒夜奴が余類よあらそとあらび下

この白骨を足て踏。よもや是を踏れまへ有何やくと言
れば。親皇内ノ縁も由縁も手に觸體踏といひ踏へまへ。
今參内する此身あざげ不淨汚穢の白骨を足てふさんも
様。細言いよどと退称。誰ある。這奴と縛よと詔
下す。仕丁ども。美諾と博雅と擊てうち。張左右ふ投げの件
飛くうんとちるおも。何處よりうへ一箇銃鉄未だ親皇
あらざきをよ
の襲束の袖貫くと。手よとあげて見てある。銃鉄未だ
一箇の釘アラ不審此主ハ何者。さりヤと倍と見る。向ふの木の間
み事あつた。運葉の濁よおぬ心事。何よう露を王よる
也。ヤアく衰実親皇の難色。蟬丸へ良岑の宗貞見參



豫譲小效
法皇の
御衣を刺

宗貞

二三九



二三五

せんと呼焉。立坐し。とえども勝巻の上ふ練波と並有り。王頭の膚當ふ虎の皮の尾轄。さけむる太刀を佩。悠く然と。床ふ腰うらうくみ。ば。脣具親皇へ鑑とす。まよへ。皆稚とゆ。宗真追勅勘。退糧奴等。我をさしま。荒夜双の残黨の。襄實親皇の余類のと。何とか聞。何を證據。よ點惠浪言。妨すかと。言れ。宗貞莞尔と。赤矣。汝幾程爭ふとも。文ふへ體。す。證人あり。ヤアく。宗貞が家隸们其者これへ。倡へと。つ。証の。下阿と。答へ。マ木彌。よ。宗貞が家隸等。ハ一個の老婆と。誘出。ヨ。絶情見。小こへ。あ。何。水ふ溺。死せりと思ひ。一そら。モ。の。姫。モア。ア。ウ。カ。ビ。流石の蟬丸直と。果れ。モロ。ト。鉗。モ。扣へ。

う。當時宗貞。ハ蟬丸。ヨ。對。も。定め。て。渠を認。て。あらん。今。吾口吟。ノ。歎。を。何。と。う。づ。つ。汝。ハ。原。未。式。部。マ。敦。實。親。の。う。皇。ヨ。仕。玉。丸。ト。呼。れ。ノ。雜。色。ふ。て。親。皇。の。遺。託。ふ。よ。ス。仁。和。寺。を。落。失。て。女。の。姿。ふ。身。を。寢。ノ。小。露。と。改。ル。木。曾。路。ある。寐。物。語。村。ふ。隱。栖。ノ。適。これ。も。蓮。の。姫。が。娘。の。紀。念。と。大。事。ふ。う。け。ノ。以。製。の。短。冊。奪。ひ。取。い。姫。を。ガ。水。ふ。溺。ら。し。妻。を。手。ふ。う。け。それ。が。着。と。う。ノ。廻。國。の。形。を。其。体。六。部。ふ。打。扮。立。退。人。と。セ。ノ。折。うち。ふ。それ。遠。ひ。く。旅。客。あ。ら。ん。そ。の。旅。客。ハ。宗。貞。ふ。て。最。前。汝。ふ。打。返。セ。ノ。手。裏。鍛。が。う。の。釵。こ。そ。當。時。汝。が。打。くる。品。あ。り。

我其ありうち此うむが水ふかがれいとくを助け送る。
 一五一十を少あいとす。恩を受く恩を知らざる者外
 禽獸ふ等くと汝親皇の鴻恩を報せんがくらふ妻を
 殺し。身を忘れ百折千磨の患苦をいとくな。謀叛
 を起せし志悪人あぐり親皇より遁れ無二の忠臣外
 れ。時勢ふ媚る凡庸の濁くふ志ある金心鉄腸感じるま
 猶余う有り。尔る忠義ある心もて何とて又禍の良利
 と偽り三原の保則ふ誥脛切らせ宝藏へ封手を付る
 と欺く。黄金若干を掠り取らし。全く盜賊光棍ふ
 等々。英雄豪傑の甚く恥る所あらずと汝を誥けり。

一首の歌。もちやうるから木名明し。尋常ふ縛うけよと。
 宗貞博雅右左より誥よきれび。蟬九聲く歯がきをほ。
 悲る面色血を乞き。阿羅殘念や口惜くユミムエ
 我大望。既に成就するさんとする今日只今。已等ごとだ
 み見頃されしぞ無念なれ。斯あるうつ何をう匿よん。今
 こそ名乗るよくゆすね。奈何ふり汝等が推量ふ違ひ。告
 へ先年奥羽ふかるて王命ふ叛た。保則春風が爲よし
 それく夷賊の棟梁熊子の荒夜及び落胤玉丸後直
 ら名を改めて蟬丸と号し。完生兄弟を商議ひ。本尊の
 案道みて保則が家隸利金太高四郎木が打取り。黄

金若干を奪ひ。其金をもて支度を調へ。稿の良利み
打粉。奥州ふ下り。太上皇の内勅と偽り。首尾克父
仇くる。保則。よ詰脇切らせ。其折柄り又數千両の金
ぬとれ。是不羨の財宝を掠るふ似られども。人の心を
結ぶ物。黄金ふあ。謀叛を企んふ軍用乏しくてあ
とふ。大功ハ細瑾をうつす。一向黄白財宝を
集う。又或時ハ白髮ふあるのを服く。無脇道人と
呼れ。外ヶ濱ある。塩焼長者文太夫が家入。と
鉢先為業も有らんと思ひの外ふ博雅奴ふ。見顯
されんとあきしゆへ。亢生の小六小七不分付殺さん。

とせくふ。却く這奴等ハ汝が為ふ終ふ命を失ふ
う。よく此上。蟬丸が死物狂ひ。死人の山を築てぐ
れん。覺悟せよと呼くるふ。宗貞博雅奮然とくそ怒
うをもく。其舌の根を斬さげんと。双方太刀を抜そ
りあきひ近くよらんとする。折うち木蔭ふ声高く。宗
貞博雅もやまう。暫らく併と立てるを何者もうと
見てあるふ。正ふ是先帝宇多法皇金剛覺みてあ
り。宗貞博雅も飛あつて平伏を。當時法皇に
稿の良利一人を俱くまひ徐くと木の音をいどく
胡床ふ腰を掛け。流石の蟬丸も天位ふ恐れて

之ひふこと

又向事あくとび。容子あらんと猶豫ふく。汰皇の蟬
九ふ對ひ。敦実が為ふ孤忠と益を蟬もとやらん。内
夫より情を丈夫の魂然うあぐら所謂盜蹟いもゆうとうせき。大の罪
を吼る類ちて。賢愚邪正の理よ疎う。敦実へ朕が
子あれど父ふ逆ふ大恩無道あれば。速そよ討手をつき
せくものを其送命ありとて。朕を付は渠へによく。十惡
の罪入ふくて。修羅の苦限くげんも一入增んふ然かに。匹夫の
志をり奪ひざるあ聖人の教けいへまれば。晋の豫讓よじょうが例たと
うち。我此衣を汝きみよ與あたへ。切きく刺通さくふして。主しゆの恨を
晴はらせうと。上うふ着きゆふ汰服たふくを脱ぬくよつまま蟬せん

の欣然として。踊揚おどりよう大きふ歡び。唐土第一の忠臣と
る豫讓よじょうが我を比ひく。汰皇の情の四詞よし有あり難く
く。忽白刃しろのこをうあむ。數回脚衣あしだいを刺貫さくぶた。主人の
恨を晴はらせうと。世よ存命くわんめいて益ますあき此身。縱や何
孟騎もんぎみて取圍とりまきがとて逃れん。易やすくとて我を縛つか
の情ふ又向ふ釘つるぎあし。宗貞博雅疾立立ちよつて我を縛つか
を功こうめ勅勘てきかんの勅解てきげせよと。太刀投捨とうすく。我と
我腕わいわんを後あとまきをふ。汰皇脚あしひき感かんきよん。宴うたまや悪あく
強つよかく又善よしな。蟬せん丸まると蟬丸せんまるが進止しんしいと殊勝ことしやく。その
心猪こころふもとて。朕わ自ら成敗せいばいうつよをべ。一傳いつだんよ

くる梅の枝を手折り。蟬丸が後ふまわう頃を喪失
と打き。花が四下より飛散る。香が四方より鄭都とく。
汰皇再び蟬丸み對ふ。これより此花が紅梅にて赤
れ則鮮血の紅ひありてねだら成敗をう。飛花落葉の
夢の世ふ何をう願ひ何をう望す。妻子珍宝及王位
臨終命時不隨者の佛の教ふ従ふ。玉の墓をう
坐て。此年來の雲水行脚汝も恩念翻し。亡敦実が
菩提の為涼しく降の道ふ入ら。命の助げく博
志べぐれど。敦実が祕藏せし。彼唐山廉玉武仙人より
傳来せし。流泉啄木。楊真操。上玄石象の祕曲汝定

て先へづらん。豫々音律の道ふ志有る。持雅ふ傳へよ。又
博雅も鷦鷯の心をひるが。蟬丸ふ仕つて。琵琶の
祕曲を習ふべし。と残るをあを汰皇の慈愛の詞ふ蟬
丸が。殆く感涙を拭ふあつば。嗚呼遇アリ。有漏路よ
ク無漏路。お通ふ一休金殿玉樓。南面のその樂も粟
の飯炊く間ある。塵世の原ふり愚の生うある。然へいへ
吾一回天下ふ箇を翻さん。主君の最期。誓ふる
詞を食て今更ふ志を変じる。是大丈夫の所為。失
らば。奈何せんと手を挾ま。默然としてのう。か何
思ふ。刀をとううめぬ忽両眼をくぐりぬれて。流す。血波

と推拭ふ。ひきよ。法皇吾眼明うみて。世の中の光景を
視るとぞ。一切の忘念忘想起うて。諸教更お止時。
今斯盲目とあれば。親皇への義心も立ちまと。法皇へ
恩義も済んぐ。吾此二ツの眼を弃一ツハ陰司の主君を
さげ。まつり陽府の一天の君へ献ぐ。奉ると思へば。どう
此山の上ふ埋め置く。其傍は唐をもとだ。まくや
惜きらん。我先年洛を立のく折うち。親皇の脚首を
此の身。えふ。ふき。此山の上ふ埋め置く。其傍は唐をもとだ。まくや
眼に見えどとも。心の眼よ花鳥を詠く。風月を灰と
して。虎渓の橋のまねあらで。闕の崖のもけくとも。
誓て山を下る。又日来よう我世を本らば彼の

流泉啄木のうせあんことを歎く。博雅は傳つまと
あるこそ幸ひ。件極曲残らば教へまひ。せん。其ううう荒
やく。やくろ。よ。夜又が觸體まが。我ふとび。悪入をび。父の白骨疎
畧ふとべきふあひ。とりふよ法皇ゆく召し。実ふ國
亂れく忠臣あらう。家惱く孝子出と忠も。う。孝
ある代。我子あび。敦実ひ連れひ。と。家隸を持つ
をす。あまち。え。汝が其誠忠を感むのあ。先く。くる。宮が靈魂を
神ふい。此之宮明神と崇ら。其傍は望のごく。よ
うの庵を掌そほせん。心易され蟬九と。寛仁大度の
法皇の詞。宗貞博雅。阿と感むをうつべ。斯く



法皇の直ひ歸洛ましく蟬丸の事を延堯帝に詣
うみ。敦實を神に祭らんことを諾せしはもつて
きのよ。帝の委細ゆづらし。朕も兄敦實君叛逆あり
いどる。仁和寺にて愛めく亡びうせさせ給ひしを。不
便思ひふ。このよを思へ立あれとて力を竭して。最
花麗。死の宮明神を造営。この傍又蟬丸が草
庵をあつて与へゆひされり。蟬丸ハ姚ふ事大きき
也。深く其聖恩を謝し。是より先宗貞博雅が勘
氣を散し。元のどとく博雅を三位とし。宗貞を
左少将の任トまひなれば。兩人とも年未の愁眉を

ひらきぬ。宗貞はとくとたゞ。蓮の姫が事を帝へ奏聞
せし。帝の抑頭うきを去りてはしをゆき。は愛情
の淚やるゝとあく姥おやぢの黄金許多賜り。生涯不足
あるゆふ養ひき。尚又小野の家は諫山清記
彼是と取まるひ梅樹丸を跡目と定め。同風毛公
の傍そばひ坐すわて。万端事を教へて守育まもひ
ける。保則つの四家も然るべた。公卿を以て養子と
て。北藤原の家たゞて。兩家とも連綿と宋へ
夫の叔置陸奥外を演ある丈太夫が娘小磯の博雅

第二十四

胡奴車妻迎

が音信やあると待うちよ。春と暮れ秋と遅もやむ
五歳の月日を経るといふ。風の便りもあらずいふ
わが尙や世人の数ふや入りきひし。又洛へ返り給
ひて増花み心うつ。もや妻がまよひ秋風のとちく
ものよ。あと右往左往思ひでけく秋の乾くひよひよ
をは。彼首此首より嫁ふとらん。舜よまらんとひよひよ
さうあるふ。文太夫も是を坐ていつまでう斯て有り
三歳過る時へ異夫を迎へうるゝ故夫いふと
詮術ある。是律の擬あらが。然るべた人をゑどして
婿ふせんと。時へいそりこども小磯の東又西又せん入

き。爰ふ頃日此外演ある縣令をハ鶴遠郡司職近
とよべる僕人あぐらうる。不岡小磯を見初是非み迎
へとらんとひふ。文太夫の渠が奸佞あり生質を乞
れが。凶志の程わざうる。れど只一人の娘あれが。よ
や郡司の仰あらとも他家の方嫁イガシトひふ。残
近ハ斯ときて然らば吾倚の方より婿入ること案道
を立ふ合せんあらじふ。文太夫ハ始々困りて縛
か左右ゆううけく。日くと延びられど郡司の催促
もう事急みて。今に詮術あく奈何せりと娘小磯
を招いた。你博雅ぬ。の為操を守る女子

の道あれが。そこと僻くどきのみよりあらずねど。男の心と
の空と世の談よりふざく。都會の入り手浮薄みて
田舎人の美理の堅先みに似む。今頃の美くを妻を
迎へ居まわんも知れが。限りなくあく。斯獨りみてあ
るべたや。然れど鴉遠の郡司ゆくがどとて木訥人を
聟あくるべき心もくらんでる。彼人々此郷の縣令を
わが我家財宝よそくくらむどとのどる。勢をもてて彼
人ふ敵くろに。強て此婚姻を固辯とたれ。豫てある
あゝを郡司嚴奈何ある奸計をもて我く又罪を負
せ。因圓ふ繫がんも知るべからぬ。今迄尔る類の邪
々

行状幾千もあり。我も愛子の你のもあらん。縱
や圓周ふつあづれ。此家道をうぐひとも惜べたゞ
あらねど。奈何せん我も此家に入聟ふ来くらるの
あれば。倘我娘のゆどもて尔る事あんじ起らまん
ハ前の丈太夫ども一對して去沢。然れど何卒心
み刀をむすびうれど。爰の道理を穿つてく。郡司ども
妻とあうてくれば。只一人の娘が生涯を仕き男
あれば。心よ潔ぬ者を迎へまん。我
きうだううれど。浮世の美理ふせきらら。詮術まき
姻も。你が入あたよおきて。此老が命を捨る。

外もと怖く勝つ。まうめんが。従来孝心深いた
小残あれど。必ず落る族をとどめ。斯迄は宣ふ事の
争が辞めべた。左も右も家は大人の心ふ。
うと。忘つゝれど丈太夫の歎き。頃々云のよ。郡司
許言送りたる。郡司の天つる登る心地にて聘礼の
品を贈る。婚姻の日を指折りて待つ。小残に
父の心を休んと婚姻の事を承引されど心のうちよ
す所詮斯る木訥男を夫として何うり樂へるべし。
此身一つを捨んみあらだと。其日の暮るとあらまじ靜ろ
ふ書置か認め。私ふ家をタケ出で演辯せらるべし。

急をさる。斯と知らひど丈太夫の虫が知らさるふや
其夜の何とすん寐苦く更闌るまで眠くよつた。
東往西往思ひタマリゆる。小残が閨の方よあれ
物音きるのみ。偶や渠短氣きる心を起し。逼て自害
をさせん。計りざつ。小刀やうの物まで傍不置く
とかたひで。娘が部屋へ入りて立つ。奈何もやその
主の空蝉のむなけの衣のをあらう。小残が居らば四下
と見る。其端は書置の事と記して。ひづりぬ。一日見るや
あらふ。其端は書置の事と記して。ひづりぬ。一日見るや
慌忙家の者と起し。此容子を詣り疾追當よ。西

とせ。狂氣を東へや走らしよ。極ほ人を四方へすく
て其踪跡を探し求むるといつても。更に知れぬまゝ
と白浪の底の藁屑と消耗するものと。狂氣の如く
歎たゞぎとされど。詮術るゝ。兔角もろ間又夜も
のくと明るあどふ。村の歩者喘く走り来り。只今浴
より三位博雅郷とすとせんざとあた四方。ある事不
や。此家へ出でく。家内の内を掃掃除して。番疎相
あひよふにて待夕と。言捨て又遷へく。走り來り
され。文太夫の心得難く更に其縁故を翁へ知ら
れど急に奴僕等分付て門を開うせ。砂と塵ら

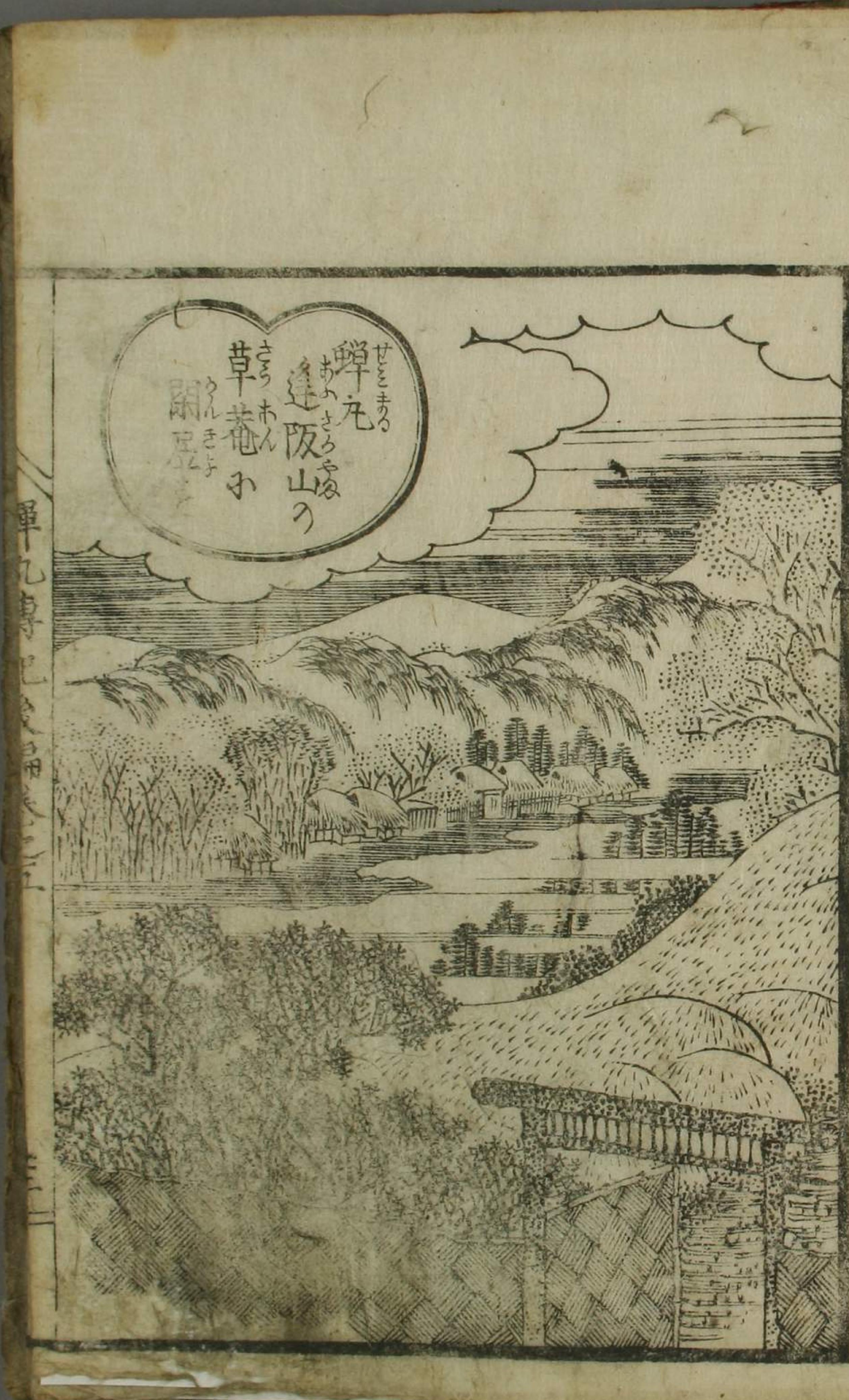
せ。水を討せ。あどて櫛引うけつて出迎えんとせらひま
ふ。と車の音を門前近く來ゆふ。文太
夫の玄関の式臺ふ低頭して待程ふ。博雅郷の車
ようあらひちまひ。踏の音高く徐々と打とめす。氣
高をひ姿よ。文太夫の歎ひうつて。奥あらゆる客
廳は案内へする。頃々遙末座ひ平伏し。思ふ
もとを貴人の何故有て斯る茅屋へ來候まゝ世
事よ。少く心得がくい。疾其子細を仰せられ下さ
く。と謹て言上ふ及びる。三位の笏取直し
文太夫は對させむ。老人敢て氣遣ふ事なれ。吾此

田爰たけふ來くわりゆ汝なふ問たずひを一茶いっさあう。立年たてとし以前延
堯元年えんじの頃ごろ洛陽画工博雅はくぎと呼よれる者久く
家やふ寄食きよくせし事ことあらんと宣のべふ。文太夫ぶんたうの曾先おとこ
裏うちをて奈何いかふる爾事のもづづと答こたふ。三位さんに再なが
宣のべふよよの折おりふる故ゆゑか娘むすめ小磯こいそとりふとものの竊ぬすふる内
博雅はくぎとよよの妻めとと嫁よふる。汝な知しらま顔ほふて暮く。妻めを引ひと
どちどて婿むすめせんせんといひいひと宣のべふ。文太夫ぶんたうにて心
よ覺おのへある所ところされが審しゆ唯いく答こたふ。三位さん郷ごう又また曰い當時彼
博雅はくぎ望のぞある身みと舞まいふる都と返かるふおよんよん。汝な新しんししに
衣きぬ一重ひとまきよ黃金こね百兩ひゃくりょうをつうだうだして娘むすめと夫婦ふうの約速あくそくを

あさあさくらくらあらん娘むすめ小磯こいそ今いまふつつき善よあきや否うやと
宣のべふ。丈太夫じゆたうの腋下わき下した冷ひやすす汗あせを流な。奈何いか
せんせんと頭かしらを疊かぶふきつけ更またよ否うる事ことを知しら。三位さん
郷ごう猶文太夫ゆうぶんたうふ對むかひ老人おじい恐おそひ忍しのる事ことあり其博
雅はくぎとのあらあら者の面おもて駄だ恰好あわせよよ磨みが姿すがたは似おなじ君きみだ
一重ひとまき宣のべふ丈太夫じゆたうの恐おそひ頭かしらを擡たおげく三位さん郷ごう
怪あやく。宣のべふ如ごく君きみの面おもて顏いろをせよよく似おなていひいよ
呑のふよよ三住さんすや亦失おもせうひひ何なをう包いよん洛らの西に
ユ博雅はくぎと言いへ笑わらひ斯このふ三住さんす博雅はくぎ之の磨みがの故ゆゑ

さて勅勘の事とある。此陸奥へ吟行你が家ふ全う
を覗きし。おなじ名を問ねて詮術あく博雅の文字
其体は音みよびく博雅と変名し。不意娘小磯と
二世の契を結ぶ。又牛頭六馬頭七とのふ悪漢を懲
せく事もんど。今又思ひ出せり往事妙記として夢み
似しきとのほん。唐よりち又諸国を偏歷して今年洛へ
赴く道逢阪嶺みて彼無腸道人となり者を見顕し。竟
ふたりの身は立派にて轉の眼を乞受て美ふ来し
か。小磯を誘ひ還らんと遙に下向せしるのそとまへま
丈太夫の狂心皆しく。娘が事を言あんとする所

面もた事限らずよくさへり入るゝ風情あるふ。三位
郷の丈太夫お對ひ。昔日の翁が好意へるゝ詞す
益一。唐今月爰々來り。下の第一よ齋せし
家土産あり。疾翁は見せまへらくて歓むせんとつとどち
く外画の方へ出車のうちより五衣は綿袴着くる。され
美糸ある上萬を倡ひ出る。丈太夫の瞳を定め
これと見る。是列人はあいだ吾娘小磯みてあくけれど
再び駭く事大きむぎ。小磯の父よろづを焼
涙ふくやうれど。丈太夫面目よくさへり低頭く詞
三位つりぬ。秋勢と蘭。翁とのぞ恥ちみゆの御墨



情の常く昨夜さくへ来る道をざと演辺みて小磯が自
み身を投んとせし所へ行きて。命を救ひしもひと
とさうじぬ二世の縁今日よしと文太夫が娘ふくで嫁す
あすば天聰を経て三位博雅が宿の妻千代は千代
は細石の巖とちりて苦むを逃れさうじぬ女夫の益ハ洛へ
帰りて行ふべし。もや疾くと宣ふよ文太夫の天ヌ井び
地ふ歎び三位々と食忘よひとまる事大きとあるよ
斯て博雅つゝ使者をして鴻遠郡司がると云のす
言送りまひなれば遠の佞奸ある郡司も證方各く何が
叔尔様の事あらんよ。苦くいふ。苦僻に其子細を知

ち子が是近の塵心の假か。幾重ともゆきと應え
られ。三位郷今ひ難も一とて小殘を誇る。不口よ帰
洛き。夫婦の心中むつまどく男女の子ども許
と多き。家畠栄へくる。蟬丸の又逢阪山ふ隠栖し。
只朝夕親王の少紀念の無名の琵琶を彈ト。祕曲
生々悉く博雅つゝ傳へ時より和歌を詠ト。聲をえ
くうううのまうよ

これやげりりくるり引ぬて。かきらきらゆき達也の夢
あと読捨し秀逸代の撰集は多く入れ。斯く或
夜の夢ふ。敦実親王。さり妹しげある百体みて吉一旦

僻る心より父帝を怨み奉る。汝又よりおた謀叛を
託せしゝど、父の情ぬよくて數ある身を神と崇め
ちる長く廟食する事。生ての恨も死ての堯び。其我を
奈何今よりとて望既み足ぬ。皇都を守るべ。と宣
ふうと思つて金色の光り發放ち。西の空へ飛去り
タハタハ。坂ノ成仏。一木ノ木ノあらんといと馳りく。い
よく道心堅固ふして長寿をとれ。天年を終じと
まへ語り傳つぬ

柳魚按ざるよ。逢阪の関の旧跡ハ逢阪山の峠
少一東上片原町尼寺の辻を言く文徳ノ金

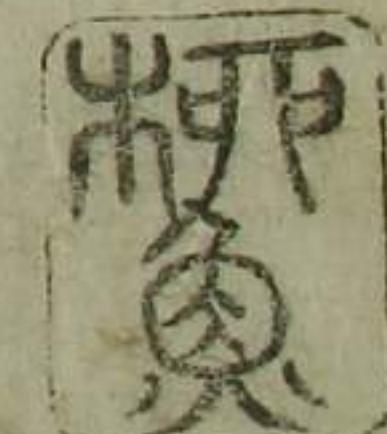
曰。文徳天皇大安元年初く逢阪の関を建す。
関守十二人。又寺門よう及壇衆二十人。兵
具嚴重ひ鎌て。金剛力士の如く忿怒の眼
を張り並び居ると見つくる。又関の明神ハ
逢阪上片原町左の上方に有る。此邊もう大
津清水町近の生土神と。祭例五月廿四日
神輿一基。清水町脚旅所へ渡り有る。祭神
二座。一座ハ猿田彦命。又道祖神。或ハ童の神
共稱む。一座ハ蟬丸の靈が祭ると云ふ。

半月夜詰後編卷之五 大尾

東都

在浪華

聞鶯軒柳魚編



東都

岳亭丘山画



浪華

淨書

外山季伦

剗刷

京都

三四卷

井上治兵衛

二五卷

市田治郎兵衛

文政十四辛卯勅春發兌

大聖歡喜天靈驗經和訓圖會三卷

春屋纖月齋老翁著
浪速柏川半山大人画

は書六天子院西院經の大聖妙印四女たりと毛後易く
かく伏服ありそ連報の風速かふ承示し然在利益を蒙るたる故の堅固をとど思圖小窓て
重達の連速を無事之誠を以て附書を送く且天子の審候又余法通より等の御了了稿
の様の御うほと示し且了女將と改め本傳十二西紀子事主度隨形御傳をば不和訓
吉之朝く君臣合支ぬ足耳朋友を答へて法華の往來教を以て於て本傳之筆景華庵を壽
子孫をく徳傳家號あくをもく徳爾よりの良的多情也流し微の詩君子必大辭義もべく要
冊子の本傳小く本う故く數多ううんと清節圖と赤奉りと云々

蕉窓方音解

東郭和田先生著

全二冊

方鑒圖解

柏浦琴鶴先生著

全五冊

朱子心學錄

明金谿王贊輯

全三冊

抑花衣竹香

遠山派

全四冊

同

抑花入綠

遠山派

全四冊

方鑒雜說

同

著

全一冊

同

寶名北海

同

全二冊

鈴木漣外先生著

温盡隨筆

全四冊

此書、国字ノ隨筆ニシテ雜俗ノ考証
方子學問ヲ心カクルニ甚ダ益アル
故ニ博物家モ座右ニ置ベキ書ナリ

頭遊仙屈鈔

唐張文成作

全五冊

書本邦ニテ中華ノ小說ヲ譯解スルハ
此書ヲ以テ始祖一人嵯峨天皇ノ時學士
伊時ナルモノ神仙譯傳テコレヲ解ス
トイヘリ小説家必讀ノ書ナリ

忠臣銘々傳

粉色入

全壹冊

此書も系後の義士四十セ個歎慕の
實錄と號て忠臣國子大人の氣概を
而書かれて人情画手本の最上品也

一勇齊國芳畫

墨色入

全壹冊

太平國恩理談 全五冊

此書も系後の義士四十セ個歎慕の
實錄と號て忠臣國子大人の氣概を

而書かれて人情画手本の最上品也

太平國恩理談 全五冊

三教童諭

全四冊

此書も系後の義士四十セ個歎慕の
實錄と號て忠臣國子大人の氣概を

古今武勇歌仙

小本 壱冊

此書も系後の義士四十セ個歎慕の
實錄と號て忠臣國子大人の氣概を

太平國恩理談 全五冊

此書も系後の義士四十セ個歎慕の
實錄と號て忠臣國子大人の氣概を

造物趣向種

全二冊

此書も系後の義士四十セ個歎慕の
實錄と號て忠臣國子大人の氣概を

此書も系後の義士四十セ個歎慕の
實錄と號て忠臣國子大人の氣概を

和對照書札

前後全二冊

此書も系後の義士四十セ個歎慕の
實錄と號て忠臣國子大人の氣概を

漢對照書札

前後全二冊

此書も系後の義士四十セ個歎慕の
實錄と號て忠臣國子大人の氣概を

星池氏書尊美ナル嘆賞ス

此書も系後の義士四十セ個歎慕の
實錄と號て忠臣國子大人の氣概を

王董齊歌川貞秀画

此書も系後の義士四十セ個歎慕の
實錄と號て忠臣國子大人の氣概を

題英畫句

全四冊

繪本彩色通 前後二冊

此書はとせ絵の家直多のものを集め
まことに其を採りて集め、其が小
鏡と人年書にして墨ト墨六自筆
をもつて其とそなえてあるべし

好華堂玉人著
女重寶記駿院 小本 全一冊

此書安五代のまほしと被服と御女重寶の
教を述揚せし者を唐乃主從食の筆、村あ
森後の筆也。或見其筆すまが古名に
古書として下り承けたどき之集の如く、其筆
三字相とも云ひておれ、女子おせうて大益
あるべし。女大學生も書き取れ必筆也
其筆を云々と傳へゆきなり

同 三編 近刻

古文書は多きものとぞ

林 書

京都寺町通佛光寺 河内屋藤四郎
江戸日本橋通壹丁目 須原屋茂兵衛
同 貳丁目 山城屋佐兵衛
同本石町十軒店 須原屋新兵衛
同淺草茅町貳丁目 英 大 助
同芝神明前 岡田屋嘉 八
大阪心齋橋通博愛閣 河内屋茂兵衛
同心齋橋通本町角 河内屋藤兵衛

飯島三省

